

益田市市長
山本浩章

「歴史は勝者によって作られる」と言われます。幕末に開国を断行し、これに抵抗する強硬派を厳罰に処した大老井伊直弼が、そのために恨みを買って殺害されたばかりか、その後の戊辰戦争の結果、官軍となった明治政府主流派により極悪人の烙印を押されたのはその一例です。

直弼の出身母体である彦根藩35万石は、徳川家康の天下取りの大功労者である井伊直政を藩祖とします。井伊家は江戸時代最多の大老を輩出し、譜代筆頭の家柄でした。

その直系とはいえ、十四男という藩主の座に程遠い生まれだった直弼は、18歳から32歳までの青春時代を自ら「埋木舎」と名付けた城下の質素な屋敷で過ごし、居合、禅、茶道などに打ち込みます。著書である『茶湯一會集』の冒頭に「一期一會」の意義を述べたくだりは、茶道の心得を端的に表現したこの四字熟語の初出例とされます。

数奇な運命が訪れたのはそれからのことです。藩主の世継ぎが早逝し、他の兄がみな他家に養子に出ていたため、直弼は期せずして第13代当主となりました。それだけでも異例の栄達でしたが、幕末の動乱の中、瞬く間に臨時の最高職である大老にまで登り詰めてしまいました。

黒船来航以降、強大な軍備を伴って開国を要求する外国の圧力と、その外国人を毛嫌いする攘夷の狂気が渦巻く中、国の独立と幕府の正統性をともに保つには非常の決断が必要でした。そして、直弼以外にその覚悟と責任感を持つ重臣は幕府にはいなかったのです。

必然として積もった遺恨は、安政7(1860)年旧暦3月3日雪の朝、「桜田門外の変」として暴発します。水戸浪士らによる前代未聞の大老襲撃は、幕末維新を血で染める無軌道なテロリズムの走りとなりました。

藩主在任期間は短かったものの、その遺徳を偲ぶ彦根の人々は明治以降もしばらくは桃の節句を祝わなかつたといえます。近代日本最初の国難を一身に背負い、果敢に対処した開国の恩人の評価が近年ようやく定着しつつある井伊直弼。その横死から160年後の春となります。

益田市の文化財の紹介

第6回 木造阿弥陀如来坐像(萬福寺)

【問い合わせ先】 市文化財課 ☎31-0623

益田市指定文化財・有形文化財(彫刻)の木造阿弥陀如来坐像は、東町の時宗萬福寺に安置されている仏像です。

本像は割劔造り※1で制作されています。像全体が穏やかな造形であり、温雅で気品のある作風となっています。12世紀に流行した定朝様とされる様式の特徴をよく踏襲した作品です。面長の顔つきと目がややつり上がる点から、やや鎌倉時代に近い時期の制作の可能性がみられます。

本像は、萬福寺の末寺の莊嚴寺(庄嚴寺)に安置されていたと伝われます。莊嚴寺は美都町仙道にあった寺院で、近代に衰え、明治42(1909)年7月に萬福寺に合併されました(『美都町史』)。その古文書や本尊が萬福寺に移管され、堂宇※2は光明寺(美都町朝倉)に移築されたといえます(『島根県の地名』)。

| | |
|-------|----------------|
| 名称 | 木造阿弥陀如来坐像 |
| 読み | もくぞうあみだによらいざぞう |
| 指定 | 益田市指定文化財 |
| 種別 | 有形文化財(彫刻) |
| 員数 | 1軀 |
| 所在地 | 益田市東町 25-33 |
| 所有者 | 宗教法人 萬福寺 |
| 年代 | 平安時代(12世紀) |
| 像高 | 44.8cm |
| 指定年月日 | 平成31年4月1日 |



(島根県立石見美術館提供)

萬福寺には4点の中世の莊嚴寺文書が伝わり、天文15(1546)年の莊嚴寺相阿弥陀仏宛ての益田尹兼書状が最も古いものです。年未詳の益田藤兼書状からは萬福寺との関係がうかがわれ、当時から萬福寺の末寺であったと思われる。本像は、莊嚴寺の遺宝としても貴重といえます。

【参考文献】『千年の祈り』島根県立石見美術館、2009年。

【註】

- ※1 頭と体の主要部を一木から彫り出したあと、耳中央を通る線で前後に割りはなし、内刳り(内部を刳り抜き、空洞にすること)を施したあと、再び接合する仏像制作の方法。
- ※2 四方に張り出した屋根をもつ建物。